

トピックス

著者に訊く

-*Daughters of the Anglican Clergy* を出版するまで-

佐藤 繭香

この夏、とある喫茶店にて、山口みどり氏に、お話を伺う機会を得ました。山口氏は、昨年、*Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England*をPalgrave Macmillan社から上梓されました。この本は、エセックス大学にて、レオノア・ダヴィドフ氏に師事した折に完成させた博士論文が土台となっています。この本は、国教会の牧師の娘をテーマとし、19世紀において宗教的家族企業である牧師館のコミュニティの中での役割や娘たちがその中でどのような役割を果たしたのか、牧師館で育ったミドルクラスの彼女らがどのような生き方をしたのかを明らかにしています。牧師の娘たちが活躍した領域は、教育の場や様々な社会運動まで幅広く、本書は、イギリス女性史だけでなく、イギリス文化を研究する人々にとって、押さえておくべきテキストといえるでしょう。

今回、山口氏には、エセックス時代の指導教授であったダヴィドフ氏との思い出、博士論文を書物にまとめるまでの苦労話などをお話いただきました。

ダヴィドフ氏は、歴史家キャサリン・ホールと *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850* (Routledge:1987) を執筆したことで知られていますが、雑誌 *Gender and History* (1989年創刊) の創刊者でもあり、イギリスで女性史、ジェンダー史という分野を開拓した歴史家のひとりでもあります。残念ながら、2014年10月に82歳で逝去されました。

*

『ザ・ガーディアン』紙に掲載された訃報は、下記の URL をご覧ください。
<http://www.theguardian.com/society/2014/nov/06/leonore-davidoff>

聞き手 山口さんの指導教授で、昨年、お亡くなりになったレオノア・ダ
ヴィドフ先生を偲ぶシンポジウムに行っていたとお伺いしました。山口
6月に Celebrating Leonore Davidoff というシンポジウムに出席して しま
した(2015年6月27日、ロンドン大学歴史学研究所)。キャサリン・ホー
ルやジェーン・レンダル、ポール・トムソン、ルーシー・デラップ、ジャネッ
ト・フィンク、キース・マックレランドといった歴史家たちが、ダヴィドフ先生
の研究の意義を確認しながら、自分たちの研究に与えた影響を語りました。

フロアにもサリー・アレクサンダーなど
有名な歴史家がたくさんいらしていました。

聞き手 女性史を開拓してきた人たちや活躍している人ばかりですね。

山口 *Family Fortunes* を執筆中、ダヴィドフとホールは、国内外のあち
こちで研究や報告を頻繁に行ったそうです。市井の男女の日記や手紙や
詩を多用した報告に、当時は批判も多かったのですが、逆に強く心を揺
さぶられ、自分もこういう研究をしていくのだというヴィジョンを得た
という声が、フロアから次々と上がりました。

聞き手 最初は、ミドルクラスの女性の生活を歴史にすることとは、
そう簡単に受け入れられなかったと思いますが、今では、女性史という分
野も確立し、*Family Fortunes* は、今では、女性史を勉強する人だけ
でなくイギリス史を勉強する人たちが皆、必ず読む本になっています。山
口さんがエセックス大学に留学したのは、ダヴィドフ先生がいらしたから
ですか？

山口 そうです。その頃エセックスには、ダヴィドフ先生とキャサリン・
ホール先生が2人もいらしたのです。この大学だったらどちらかには
教えてもらえるだろうと思った訳です。けれども、エセックス大学に
知り合いもいなかったものだから、紹介もなく、普通に留学手続きを取
った結果、向こうから提示された指導教官はダヴィドフ先生ではあり
ませんでした。私の研究ではダメとおっしゃったということかしらと悩

みながら、指導教官として提示されたミアム・グルックスマン先生の著書も読んで、それもとても面白かったので、すごく悩みました。ちょうどそのときに、ブリティッシュ・カウンシルでエセックス大学の留学案内が開かれていたので、そこで相談したところ、担当者の方がうまく問い合わせてあげようと言ってくださいました。実は、ダヴィドフ先生はオーストラリアに研究休暇にいらしていて不在だったらしいのですが、折よく帰ってきて話を聞き、私のプロポーザルを検討してくださいました。それでダヴィドフ先生につくことができたのです。

聞き手　それで、最初からダヴィドフ先生に教わることになったのですね。ダヴィドフ先生は、どんな指導の仕方をされるのでしょうか？

山口　牧師の娘というテーマで研究することになった時、私は国教会のことは全くわかりませんでした。そこで、最初にやらされたのは、「ポジション・ペーパー」を書くという課題です。例えば「教会組織について」というようなテーマを出され、期限を設定されて4000-5000字程度のレポートにまとめるというものです。そうした課題を通して、研究する準備を進めていきました。先生が*Family Fortunes*を執筆する時にも同じやり方をしたそうです。例えば、バーミンガムの人口とかバックグラウンドを調べ、2人でペーパーを書いて、そこから始めたということです。

聞き手　結構、地道に一歩一歩固めて行くという感じですね。

山口　そうですね。自伝を読みなさいということも言われました。ダヴィドフ先生ご自身が*Family Fortunes*で使った自伝の中から牧師の娘が書いたものをピックアップしてくださったので、まずはそれを読んでいきました。それから文学作品も読みなさいと言われました。ブロンテ姉妹の作品などはある程度読んでいたのですが、ベッドタイム・リーディングとしてまずウィリアム・サッカレーの『虚栄の市』を薦められました。そのころは他の課題も多くて、寝る前に本を開いてもすぐに眠ってしまい、なかなか進まなかったのですけれども。

聞き手　今回、出版された本のなかでも、史料として本当にたくさんのお伝を使っていらっしゃる。

山口　最初は、牧師の遺児のためのチャリティとか、牧師の娘のための学

校とか、そういった機関や組織の記録を史料として使うことを考えていたのですが、ダヴィドフ先生は、むしろパーソナル・ナラティブの方を使いなさいとおっしゃいました。

聞き手 博士課程を始めるときには、もう今回の本のテーマでもある牧師の娘というテーマは、すでに決まっていたのですか？

山口 修士論文では、ヴィクトリア時代のガヴァネスについて研究しまして、ガヴァネスの求職広告を分析しました。『タイムズ』紙に掲載されたものです。そのなかで、「牧師の娘」だとか「医者 of の娘」だとか、親の職業を前面にだして職を求めるようなものを割と目にしました。それがすごく心に残っていました。また、牧師の娘のための学校や牧師の遺児のためのチャリティというのがあったりだとかして、父親の職業というのが女性の生活にこんなに影響を与えているということが面白いなと思いました。それで、博士論文のテーマとしては、最初は、「プロフェッション層の娘たち」はどうかと考えました。ですがダヴィドフ先生には、テーマが広すぎるので少し狭めなさいといわれました。では「牧師の娘」だったらどうだろうと言ったら、先生の表情が変わって、「それはすごくいい」ということになったのです。

聞き手 そうやって研究が始まって、自伝を読んだりする傍ら、史料探しも始められる訳ですよ？

山口 史料探しには、全く困ったことがなくて。というのもあふれるほどあったのです。

聞き手 でもその中で、何をを使うのか選ぶのは大変だったのではないですか？

山口 そうですね。そのとき先生に言われたのは、「あなたはちゃんと捕まえておかないと、すぐにどこかに飛んで行って、史料の海に溺れてしまうかもしれない」と、だから「ちょっと待ちなさい」と言われました(笑)。「行く前に、ちゃんと計画的に何を調べたいのかということを確認にしてから行きなさい」と。

聞き手 山口さんの本の最終章で、ルード家というひとつの牧師の家族を取り上げて、家族の歴史を掘り起こしていらっしゃいますが、あれもそうやって史料をみつけてきたのですか？

山口 あれは、たまたまエセックスの公文書館にあったもので、それを見つけて、ダヴィドフ先生に報告したら、「ああ、私の友だちに会ったわね」とにっこりされました。先生も *Family Fortunes* の中でその家の先祖を取り上げていたのです。実は、私の博士論文のなかに、ルアー ド家の 12 人兄妹を男女のグループに分けて撮った写真を載せたのですが、先生の遺作になる *Thicker Than Water: Siblings and Their Relations, 1780-1920*(2012) という、兄弟関係をテーマにしたご著書のカヴァーがその写真です。

聞き手 そこで使ってくださいったんですね！

山口 取られちゃったんです(笑)！「あれ、使っていいかしら？」と言われたので、「どうぞ、どうぞ」と。そのダヴィドフ先生の最後の本が、私がちょうど本を書いているときに出版されて、ずっと私の机の上にあったので、ルアー ド家の子ども達にじっとみられているなかで執筆をしていました。

聞き手 その他に面白い史料との出会いはなかったのですか？

山口 ラッキーだったことに、ロンドン大学の歴史学研究所で知り合った 若手の研究者に海軍女性部隊の研究で Ph.D. を取った人がいて、海軍にも牧師の娘がたくさんいたと教えてくれたのです。親切なことに、ご自分が使った公文書館の史料のなかで、父親が牧師だった部隊員のリファレンス番号を全て教えてくださったので、ピンポイントで調べることができました。その方は、軍隊の記録には何でも載っているわよとおっしゃっていました。父親の職業とか教育とか前歴がわかるんですね。

聞き手 ああ、身元がはっきりしていないといえられないので、記録がしっかりしているのですね。

山口 そうです。

聞き手 牧師の娘で軍隊に行くというのは不思議な感じがするのですけれども。

山口 順番としては、陸海軍士官の娘が一位、二位で、三番目が牧師の娘でした。士官はミドルクラスの職業ですので、親は牧師だけど親戚には士官も多い家庭の女性が応募してくるのです。特に海軍の方です。陸軍女性補助部隊の方は、ワーキングクラスの女性が多かったのです。それ

と、責務(duty)ということですね。社会のために何かやるという考えから女性部隊に入ったようです。

聞き手 牧師の娘の話というのは、すごく色々な方面に広がりますね。

山口 私もまさか軍隊の記録を使うことになるとは思いませんでした。

聞き手 牧師の娘たちの中には、結構、女優になった人達も多いようですが？

山口 女優になった人もいるし、参政権運動に参加した人もたくさんいます。私も参政権運動に参加した人があれほど多いとは、最初は思いませんでした。どちらかと言えば保守的な女性というイメージだったので、反女性権運動に加わった女性の方が多いのかなと、先行研究からはそういった印象を持っていたのですけれども、実は参政権運動に参加している人が多かったですね。これは最後の最後に気づいたのですが、ある年代を境にして、参政権運動にのめり込んでいった人が多くなっていきました。その背景となったのは、牧師の娘で高等教育を受ける人がある時期に急に増えたことと関係があるのだと思います。それから、貧困層との関わりが牧師の娘は多かったので、その貧困問題をどうにかしなければという意識から参政権運動の方へ入っていったようです。自伝をみると、親に連れられて貧民街に行った経験から社会事業に入っていくと、参政権の必要性に気づいていくという流れがみえます。ミドルクラスのなかで、子ども時代に貧民街で暮らすという経験があるのは、恐らく牧師かまたは一部の医者くらいでしょう。そういう意味でも「牧師の娘」というテーマは面白いと思っています。もちろん、牧師の娘のなかでも生活の状況は色々ですけれども。

聞き手 牧師の娘たちは、本当に現場を知っている女性たちということですね。彼女たちのことを本にするにあたって、博士論文からだいぶ削ったところなどはありますか？

山口 帰国して、本にするまでにずいぶん時間がかかりましたが、よかったことは、母語で考え抜くということができたことです。それがあったから、この本では、博士論文よりはずいぶん内容的にも充実させることができたのではないかと考えています。ただ、私の博士論文は、先生のお考えで、最初から出版ということを考えて構成もつくっていました。

聞き手 今回、本の構成も色々テーマ的になっていますが、どう組み立てていったのですか？

山口 構成も実は博士論文そのままなのです。内容的には発展したのですが、章立てやアウトラインはほとんど変わっていません。最初に引用があつて、それからイラストがあつて、というような構成も、博士論文と一緒にです。もちろん、少し変えた部分もありますが。

聞き手 なるほど。章の最初に引用があると、とても話に入り込みやすく、読みやすかったです。今回の本でとても面白かったのは、引用が本当にたくさん使われていて、それが話にあわせてうまくつなぎ合わされていたところなのですが。

山口 それでも捨てなければいけない面白い引用はたくさんあつたので、それがとても残念です。対象とした娘たちも、本当にもっとたくさんいたのですが、それもずいぶん削りました。

聞き手 ダヴィドフ先生も残念ながらお亡くなりになってしまいました。この本の表紙は先生が選んでくださったとお聞きしましたが？

山口 表紙に使用されている絵画は先生が選んでくださっていて、本自体は先生にお見せできませんでしたが、最後にお会いしたときには、カヴァーの見本をお見せすることができました。その出来には先生も満足してくださいました。ラファエル前派のなかでは比較的マイナーな画家の作品なのですが、先生は闘病中にたまたま誘われてこの画家の絵画展に行き、この絵を見つけたということでした。(表紙は、John Atkinson(1836-93)による *The Rector's Garden, Queen of the Lilies, 1877.*)

聞き手 とてもいい絵ですよ。牧師館が背後にあつて、白いドレスの牧師の娘が庭に立っていて。

山口 私の本のなかで、牧師館が女性化したということを取り上げているので、そういう意味でも、女の人が牧師館の庭に立っているというのは象徴的だと思っています。また白い服を着て、百合の花を持っているというのは、道徳性をあらわしていて、それを武器にして自分の領域を広げていったというように読めます。白い服を着ているので、牧師館からお嫁に行った女性かもしれないし、お嫁に来た女性かもしれません。色々な解釈ができる絵画だと思っています。

聞き手 これで、牧師の娘の話はひとまずまとめられたと思いますが、今後の研究はどうお考えですか？

山口 数年前に研究休暇をいただいたときに、「宗教と遊び」というテーマのシンポジウムに誘われました。そのメンバーで何かやっという計画が進んでいます。また、今回の本のなかで欠けていたものとして、牧師の息子たちの話があります。そこで、息子たちの話はやらなければいけないかなと思っています。19 世紀にできた名門パブリックスクール、例えばマールバラ校などは、大抵、牧師の息子たちのためのものとして始まっていました。ヘイリーベリー校は生徒の 3 分の 1 を牧師の息子にすることになっていました。そうすると、インドとの関係は？ など関心が広がります。こういうところからみていければ面白いかなと思っています。

聞き手 研究をぜひ進めて、男の子達の話もぜひ本になさってください。楽しみにしています。今日は、本当にありがとうございました。

(2015 年 7 月 10 日 13:30 ~ 武蔵浦和にて)